

コイル切手の製造面を整理したリーフ

永吉 秀夫

会報 286 号で紹介した「15 円きくコイル」のリード紙違いを、リーフに整理してみました。2つ折りにして透明フィルムで包み、両面テープでリーフに貼りつけてあります。黒塗りの方にも未使用切手がついていてほしいですが、裏面にまでしみ通ったマジックインキの様を見せるのも有意義です。リード紙違いのほか、詳細に調べないとわからないバラエティですが、「実用版の継ぎ目」を表現してみました。詳しくはリーフの書き込みにて(読めますでしょうか?)。(訂正あり→赤線)

15円 きく 改版コイル

1968. 1. 9
グラビア 2色 目打 横13

1968年1月9日に東京中央局で初日発売されたあと、翌日から2月29日までの東京目黒柿ノ木坂局における新規販売機実用化試験を経て、各地の販売機で販売されるようになった。

印面の継ぎ目

濃色

淡色

丸穴 ←

リード紙 終端 ←

印面を焼きつけた感光紙をシリンダに巻きつける際のずれのため、継ぎ目をはさんで、上下の印面が約0.2ミリ左右にずれている。
継ぎ目をはさんで青色濃度が異なるのは、巻き付けた感光紙両端の焼きつけ強度の違いによるものと考えられる。

リード紙(巻き始め=販売終了側)

販売部分前後に付加されているリード紙は、初期製造分(500枚巻き)では白紙、後期製造分(1000枚巻き)では黒塗りとなっている。いずれも最終印面から数えて6枚目に、販売終了位置検知用の丸穴がある。

左側：白紙 右側：黒塗り →
黒塗りが印面途中で終了しているのが、ここがリード紙終端であることがわかる。

関連品として、次の時代の「20円まつコイル」にも存在するバラエティを紹介しておきます。このコイル切手のリード紙は黒塗りのみですが、販売終了位置を検知するための「丸穴」位置にバラエティがあります。封書20円時期に製造されたものでは黒塗り6枚目に丸穴があるのに対し、封書50円時期に製造されたものは1枚目に丸穴があります。後者は1979年に開発された新販売機用に製造された分です。詳細は省略しますが、この仕様変更には必然的な理由があります。新販売機では10枚までの切手を一操作で買えるようになったことと関連しています。

高倍率のルーペで調べなければわかりませんが、これら2時代の切手にはグラビアスクリーンの線数にも違いがあります(初期230線、後期250線)。リーフで表現するのは難しいですが...

20円 まつ

コイル切手 1972. 2. 1

1972年2月1日の料金改訂に合わせて発行され、それまで15円コイルを販売していた単能式販売機で販売された。1976年の料金改訂後は同じ販売機で50円コイルを販売するようになったが、1979年4月2日より稼働した新開発の多機能販売機で発売するために再製造された。当初製造分とはスクリーン線数に違いがあるほか、黒塗りリード紙に開けられた販売終了検出用の丸穴位置に違いがある。



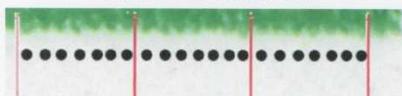
当初製造分

230線(1ミリあたり網点6.5個)



1979年以降製造分

250線(1ミリあたり網点7.0個)



1972年発売分
6枚目に丸穴



1979年発売分
1枚目に丸穴